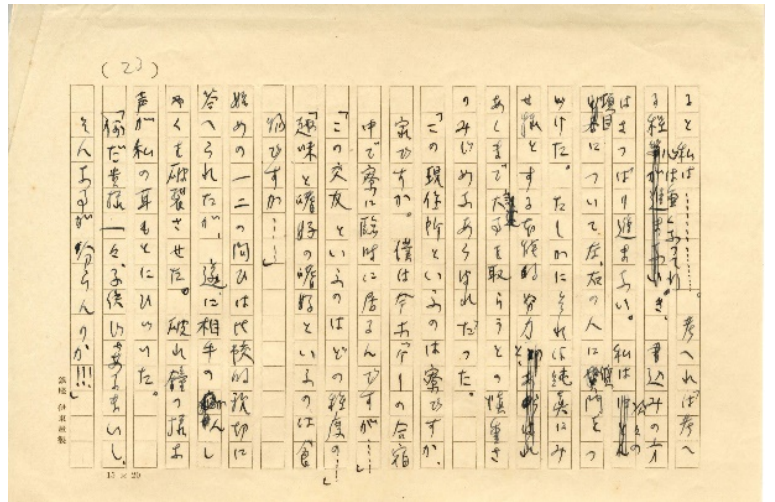


(4) 検挙経験

先述の通り、一高の寮には共産党が浸透していたが、寮で丸山が検挙されることはなかった。しかし、2年次の終わりに唯物論研究会主催の長谷川如是閑の講演を聴きに行ったところ、逮捕拘禁されてしまう。講演会は開始とともに警察に



よって即刻中止となったが、会場で目をつけられていた丸山は退場の際に検挙され、本富士署に拘留されたのである（画像：「一高時代 1933年の手記 4月10日の手記」〈丸山文庫資料番号517-4〉）。

留置場では収容者に無造作に振るわれる暴力を目の当たりにした。東大生や一高生に対するものはもっとも軽い部類だったが、独立運動に参加している朝鮮人は取り調べごとに半殺しの目にあっていた。丸山自身も暴力の対象となった。ドストエフスキー『作家の日記』の一文「わが信仰は〔神の存在に対する〕懐疑の坩堝の中で鍛えられた」から想を得て、日記帳に書き記していた「日本の国体は果たして懐疑の坩堝の中で鍛えられているであろうか」という文が、君主制を否定するものとして見咎められた。弁解しようとしたところ、有無を言わず殴られたのである。丸山は後年、明治憲法下の天皇制が「否定をくぐらない肯定」によって支持されたに過ぎないものであって、逆説的に脆弱であった証左としてこの出来事を回顧している。

検挙されたことは、丸山にとって自身の弱さを自覚する機会でもあった。

初め一高のときつかまったときは、気持ちが動揺していたから。ぶん殴られたりするでしょう、だから留置場の中に入ってきて泣いたですよ。おれという人間はなんてだらしのない人間だと思ったね。（「1月13日 丸山眞男先生速記録」）

釈放後、1週間もしないうちに学校から呼び出されると、丸山は学校の幹部からクラスの思想傾向について尋問を受けた。思想統制を担う特別高等警察（特高）は学校と連絡をとっており、大学に入っても学生課から呼び出され、学生主事の説教を受けたという。以降、折に触れて特高に呼び出されるようになり、大学2年次には突然自宅に特高刑事が来たために検挙されていたことが母に知られてしまった。大学卒業後は助手に採用されて大学組織に守られるようになったが、今度は憲兵につきまといわれるようになり、簡閲点呼（現役を退いた在郷軍人や徴兵検査に合格しながら徴集されなかった者を対象とする）の際には、一人残されて尋問されたという（この日だけは軍の指揮下に入るため）。敗戦後に特高と軍が解体されるまで、丸山は左翼組織に関わりがあるという疑いをかけられて思想犯予備軍のブラックリストに入れられ、継続的な監視の対象となった。丸山の見立てでは、関与の痕跡が何も出てこないのに、余計に怪しまれたのだと思われる。定期的な尋問は、「お前はどこにいてもちゃんと見ている」ということを言外に示しており、丸山を「いやな気持」にさせるものであった。

敗戦までの丸山の著作や行動を考える際は、このような負荷が常に重くのしかかっていたことを念頭に置いておく必要がある。「何か論文一つ書くにも突っ込んでかこうとする

と、ここでどうかなあと思って、一步手前で逡巡するというあの気持、あれはほんとうにいやだったな」。また、東京帝国大学法学部助手への採用が決まり、師の南原繁から「順当に事が運ばば君を〔法学部の〕スタッフの一人としたい」と切り出されたとき、丸山は高校時代の検挙経験を明かし、「将来のことは自分としては考えていない。助手になっても万一に法学部に迷惑をかけることがあったらすぐ辞表を書く」と南原に答えた。監視の目から解放された戦後になって丸山は、「国家権力が精神の内面に土足で入りこんでくる」という検挙とその後の体験をもとに、その名が広く知られるきっかけとなった論文「超国家主義の論理と心理」（1946年）を執筆し、「自らの妥当根拠を内容的正当性に基礎づけることによっていかなる精神領域にも浸透しうる」という特質をもつものとして近代日本の天皇制を批判的に対象化した。それは、近代天皇制の存在を自明のものとしていた「つい昨日までの自分にたいする必死の説得」でもあった。